

何度でも味わいたい「夢の味」

ウオッカによって64年ぶりに成し遂げられたダービーでの歴史的な快挙。そしてこの勝利は、現役では6人目となる新しいダービージョッキーが誕生した瞬間でもあった。四位洋文、34歳。全国屈指の実力を誇る名手について舞い降りたジョッキー最高の荣誉。ウオッカとともに歩んだ栄光の道程を、ここで振り返ってみる。

島田明宏=文
text by Akihiro Shimada

四位 HIROFUMI SHH 洋文



乗り替わりを覚悟した桜花賞の敗戦。だが、陣営の言葉はあたたかかった

敗因を問われても、すぐには言葉が出なかった。何がなんだかわからない、というのが正直なところだった。2007年4月8日、第67回桜花賞。単勝1・4倍の圧倒的1番人気に支持されたウオッカの主戦騎手・四位洋文は、大いなる勝算を胸にこの舞台に立った。――こんなに楽な気持ちで臨めるGIは、まずないだろうな。

なぜいつもとちがったのか……四位は首を傾げた。これも桜花賞ならではの怖さなのか。いや、改修前の旧阪神コースならともかく、今の舞台は強い馬が強い競馬をするコースだ。つまるところ、あの日は、ダイワが強くてウオッカが弱かった、ということかな。そう考えるよりほかなかった。騎手は、レースの結果に責任を負わせる立場にいる。GIばかりでなく、たとえ未勝利戦であっても、だ。四位も、乗り替わりになる覚悟を決めていた。

四位が初めてウオッカに跨ったのは、デビュー戦の2週間前追いつきのときだった。普段から角居厩舎の調教をサポートしている四位に、角居が声を掛けた。「どんな馬に乗ってみてくれる？」坂路の上で初めて跨ったとき、そのどつしりとした雰囲気から、四位は、まるで牡馬のようだと思った。四位に与えられた予備知識は、性別のほかは、ウオッカという名で、その名が示すとおりタニノギムレット産駒であることだけだ。ウオッカに乗ってCウッドコースを回ってきた四位は、角居に、「この馬いいです。いいです」としか言えなかった。

レース前、四位は、ダイワスカールレットとアストンマーチャンにじっくり待たれたら嫌だなと思っていた。ところが、いざゲートがあくと、その2頭が外からグリーンと馬群を引っ張る格好になった。内心、シメシメと思った。

は海外出張のため不在だったが、厩舎スタッフと四位とともに、桜花賞のパトリックビデオを見ながら、ちよつとした作戦会議のような話し合いになった。谷水が四位に言った。「負けたんだから、次はダービーではなくオークスだな。オークスで頑張ろう」四位にとっては、あたたかく、また、心強いひと言葉だった。

ものすごく好きなタイプの馬だった。乗り味も、背中も、ストライドも、手綱から伝わってくるハミ受けの感触も……すべてが素晴らしく、それゆえ、かえって上手く言葉にできなかった。そのとき、何より強く感じたのは、スピードがある、ということだった。それも、諸刃の剣になりかねないほどの、抜きんでたスピードだ。

レース前、四位は、ダイワスカールレットとアストンマーチャンにじっくり待たれたら嫌だなと思っていた。ところが、いざゲートがあくと、その2頭が外からグリーンと馬群を引っ張る格好になった。内心、シメシメと思った。しかも、ウオッカは、これまでにないほど折り合っていた。が、いつものウオッカなら、道中、弓を引き絞った状態で追走できるのに、この日は、弦を引かないニュートラルな状態で走っていたがために折り合ったような感じだった。ウオッカは、勝負所に来て弓を引き絞ることができず、勝ったダイワスカールレットに1馬身半およばぬ2着に終わった。

「負けたんだから、次はダービーではなくオークスだな。オークスで頑張ろう」四位にとっては、あたたかく、また、心強いひと言葉だった。なお、四位に、ウオッカのダービー参戦が知らされたのは、それから1週間ほど経った日のことだった。それまでの経緯をなぞるにあたり、昨秋の、四位とウオッカとの「ファーストコンタクト」から振り返りたい。

ウオッカのデビュー戦の日、四位は秋の天皇賞に騎乗するため東京競馬場に行った。佐賀の鮫島克也が騎乗した新馬戦を、四位はテレビで見ることになった。やはりな、と思った。スピードがありすぎるウオッカは、言葉は悪いが、乱暴な走りをしたまま勝ってしまった。自分が手綱をとる2戦目の黄菊賞が、この馬の先々を決める重要なレースになる。もともと持っている傑出したスピードをコントロールしながらレースをしてあげたほうが、先の楽しみが広がるはず



「お前、これがクセになるんや」 今だから分かる武豊騎手の言葉

だ。逆に、新馬戦と同じような、力任せの乱暴なレースをすると、ただの逃げ馬になってしまいかもしれない。

角居と話し合い、道中は前に馬を置いて我慢させる競馬をすることにした。ウオッカは、なんとか我慢しながら走ってくれた。前残りのスローな流れを差し切れず2着に敗れたが、四位にとつて、これは納得の2着であった。

そして3戦目の阪神JF。ウオッカは、それまで牡馬を含めても圧倒的強さを見せてきたアストンマーチャンをかわし、2歳女王の座についた。このとき角居は公言こそしなかったが、すでにダービーを意識していた。しかし、四位は、この時

「これだけ強い競馬をするなら、男馬とやらなきやいけないね」という角居の言葉を、四位は、冗談めいたものとして受け止めた。が、少し経つと、角居が「桜花賞を勝てばダービーにむかう」と話していることを、彼は自身の「エージェント」から聞かされた。

驚きはしなかった。別に強がるでもなく、面白そうだな、と思った。フサイチホウオーには一目置かなければならない。が、今年の3歳牝馬のレベルの高さを感じているだけに、ほかの牡馬なら負かせるかもしれない。桜花賞で2着に敗れ、最終的にダービーに挑戦することを知ったときも、その

思いは変わらなかつた。実は、桜花賞前の稽古で、ちよつと馬の気分を乗せすぎたかな、という気がしていた。だから、ダービー前の調教では、彼女のテンションを上げすぎないように留意した。やるべきことはやった。金曜売りの段階からウオッカの人氣は高く、単勝3番人氣に支持された。応援の意味もあるのだろうし、このチャレンジを多くの人が評価してくれている証だと思つたと、嬉しかったし、心強かつた。

点では、ウオッカが10月に五大クラシック登録をしていたことすら知らなかつた。4戦目、今年2月のエルフィンSを、他馬より2.5重い56kgを背負いながら調教のような競馬で勝つたとき、四位は、教のような競馬で勝つたとき、四位は、——この馬は、ぼくの馬に対する知識と経験の規格を超える馬かもしれないな、と思つた。

そして、次走のチューリップ賞。4コーナーから持ったままでダイワスカーレットに並びかけ、ダイワとのマッチレースを制した。

レース直後、角居が四位に訊いた。「どうだった?」「ぜんぜん楽しかったよ」

5月27日、第74回日本ダービー当日。パドックで跨つたウオッカは、見た目にはさほどでもなかつたが、いつも乗っている者の感覚では、イレ込んでいることがわかつた。無理もない。初めての長距離輸送で、着いたところが、これも初めての大きな東京競馬場。しかもこの大

観衆で、周りを見ると男馬ばかり。そんな不安だらけの彼女が頼れる存在は自分しかない。自分の最初の仕事は、たつたひとりの女の子であるウオッカを、細心の注意を払つて安心させ、ここからゲートまでエスコートすることだ。しかし、ゲートがあいてからは、彼女が女であることを忘れようと思つた。いつもの強いウオッカなら、牡牝かを意識して競馬をする必要はない。とにかく、4コーナーまで上手に持つて行つてやる。自分が最大の仕事になる。ゲートがあいた。ウオッカはいつもどおり速いスタートを切つた。手綱を抑えると、すつと馬込みのなかでポジションを固定した。レース前は、馬群が殺到する1コーナーで他馬と衝突して戦意を喪失する可能性を危惧していたのだが、スムーズに1コーナーをクリアした。確かにウオッカは折り合つていた。が、折り合つたと思つとちよつと行きたがり、鞍上から「まだダメダメ」という意思を伝えると折り合い、また少し行きたがる。と「ダメダメ」とやつているうちに、勝負所に来ていた。桜花賞とはちがひ、スタートしてからここまで、ずつと弓を引き絞つたままだった。あとは、矢をつかんでいる手を放してやるだけだ。4コーナーで、四位は軽くチョンと指示を出した。次の瞬間、ウオッカは凄まじい速力で他馬を抜き去つた。前の馬が止まっているように見えた。四位にしてみると、馬群を抜けて、直線、前にアサクサキングスとサンツェッペリンの2頭しか見えなくなるまでが一瞬の出来事に感じられた。速いだけどもスローモ

ーションに見えた——これが、ダービー史上最速の上がり33秒フラットのスピード感である。四位とウオッカだけが「別の入口」を通り、突き抜けていた。こんな楽に府中の坂を上がつてきているのか、と思つた。彼女のベストパフォーマンスを見せられるよう4コーナーまでは誘導できたが、そこから先では、もしかしたら男と女の差が出るのかもしれない……という不安が心のどこかにあった。何かに差されるかも、と思ひながら追つた。が、蹄音は聞こえてこない。——おれ、勝つのか? 勝つよ、やつた勝つよ! 四位洋文のウオッカは、2着を3馬身突き放してダービーを勝つた。四位にとつて、これが11回目の挑戦だった。騎手になって本当によかつたと思つた。最終の目黒記念後のイベントを終え、武豊と並んでシャワーを浴びた。「よかつたな、おめでと」と武。「はい、ありがとうございます」「でも、お前、これがクセになるんや」そのときはピンと来なかつたが、今なら先輩の言葉の意味がわかる。何度でも味わいたくなる「夢の味」を、ウオッカは与えてくれたのだ。ウオッカがこの先どこまで強くなるのか、「恋人」の四位にもわからない。ただ、多くの人々の心を動かすこの馬の背中にいられることを、何よりも幸せに感じている。今なお四位洋文にとつて規格外の存在でありつづけるウオッカが、次に与えてくれる規格外の「夢の味」は、一体どんな味なのだろうか。



photograph by H.Watanabe, K.Yamamoto, M.Yamada, H.Matsuzaki, K.Ishiyama, Y.Hatanaka